2010 年 11 月 11 日(木) Le Soir d'Algérie 紙(日刊全国紙) 12～13 面(文化欄)

本紙独占インタビュー

欧州にマンガを紹介した日本人、竹本元一は本紙ル・ソワールに語る：

「マンガはよいもの。けれども、アルジェリアの豊かさ、伝統、歴史を忘れてはいけない」

竹本元一（1953 年、日本の松戸生まれ）は、マンガ大使と呼ばれている。伝説の漫画雑誌「ル・クリ・キ・チュ」により初めて欧州にマンガを紹介したからだ。この雑誌の発行は 1978 年から始まった。欧州でマンガのパイオニアと言えば、竹本のことだ。彼は 2007 年にスキクダ県に来て、それ以来、同地の Cojaal の通訳・翻訳者として働いている。竹本は、その業務のかたわら、日本語、英語、フランス語、スペイン語、アラブ語を教えている。竹本の活動はこれにとどまらない。30 年以上の旅行業界（フランスとスイス）での経験がある。加えて、サウジアラビアではフジアトラス・ワールド・エクスチェンジ・センターの代表だ。その上、乗馬が好きで、乗馬観光の開発をフランス、スペイン、日本、アラブ諸国（ドバイやモロッコなど）で行っている。それだけではない。音楽への情熱も抜きん出ている。狩猟ホルンを自ら吹くほど狩猟音楽の愛好家だ。ブランス・バンドに所属していたこともあれば、アマの交響楽団のホルン奏者だったこともある。フラメンコは歌いも踊りもする。さらに、フェンシングも彼の人生の一部だ。竹本は、平凡な人生と時代に挑戦する日本人のもうひとつの典型である。

以下に竹本へのインタビューを掲げる。
（Q：ル・ソワール・ダアルジェリー、A：竹本元一）

Q：多くの分野で同時に活動されていますね。たいていの人は、そんな生活にたいへん驚くわけですが、いったい、どうすればできるのですか。

A：私は、好奇心が強く、あれもこれもやりたいと思ってしまいます。典型な辰年の山羊座の性格ですね。とはいえ、私は、自分で決めたことは必ずやり遂げる人間です。だから、これまでの活動は、これからも続けます。フェンシング、乗馬、フランメンコ、吹奏楽（ブランス・バントと交響楽団）は、死ぬまでずっと続けていきます。私のやっていることは互いに結び付きます。たとえば、5 月のヘレス・デ・ラ・フロンテラ（訳注、スペイン、シェリー酒で有名）の馬祭りでは、観光、フラメンコ、乗馬を組み合わせた企画を出しています。これは、乗馬観光の開発という私のライフワークを達成するひとつの方法です。ご存知でしょうか。フラメンコと馬は無関係ではないのです。フラメンコのルーツはいろいろありますが、そのひとつは、馬の蹄鉄をたたいていたジプシーの鍛冶屋の歌、つまり、マルティネーテのリズム（フラメンコのジャンルの一つ）なのです。そして、ヘレス・デ・ラ・フロンテラは、純血スペイン種の馬の産地としても有名なの

です。

Q：あなたは日本のマンガを初めて欧州に紹介しました。1978 年のことですね。なぜ、日本を離れ、外国で「初めてのこと」をやろうと思ったのですか。

A：当時、私はスイスのジュネーブで日本人観光客のガイドをしていました。ジュネーブに出版社をつくり、1978～84 年まで「ル・クリ・キ・チュ」を発行し、手塚治虫、石森章太郎、赤塚不二夫（日本マンガのこの三大巨匠はすでに数年前に他界)、「ゴルゴ 13」のさいとう・たかを、辰巳ヨシヒロの作品の幾つかを紹介しました。私のやりたかったことは、欧州ではあまり知られていない日本のアートのいくつかの局面を見てもらうことです。つまり、日本の大使館や領事館のやっている生け花教室とか折り紙教室とかでは見ることのできない日本です。日本の素顔を紹介するには、映画を見てもらうことが必要だったのですが、これには巨額の予算が必要でした。惜しみなくお金を出してくれるスポンサーを見つけることはできませんでした。だから、マンガに向かったのです。当時、文化交流を行う上で、また、日本を知ってもらう上で、マンガは理想的な手段だと思いました。欧州の人々にとって日本のイメージと言えば、ゲイシャ、フジヤマ、スキヤキといった程度でした。そんな風潮が変わったのは、日本が G7 サミットに参加するようになってからです。多くの国の特派員が日本に来ましたからね。

Q：1978 年に創刊された雑誌「ル・クリ・キ・チュ（Le cri qui tue)」がどうなったのか話して頂けませんか。

A：「ル・クリ・キ・チュ」は、スイスでつくられたフランス語の雑誌で、フランス、ルクセンブルグ、ベルギー、カナダに輸出されました。ミッテランが大統領に就任すると（訳注：1981 年)、フランス・フランがスイス・フランスに対して、その価値が 3 分に 1 になるほど弱くなりました。さらに、取次ぎ会社 NMPP から課せられた売れ残り回収の条件が達成しがたいものとなり、出版を断念するしかありませんでした。けれども、出版家になったおかげで、アングレームを初めとするフランス諸都市の漫画博覧会に行くことができました。

Q：今日、つまり、廃刊になった後に、欧州におけるマンガのパイオニアと、つまり、「日の出ずる国」からのマンガの大量流入を最初に予見した者と言われるようになったわけですが、廃刊はあなたにとって失敗だったのでしょうか、それとも、成功だったのでしょうか。

A：私は実際のところ、成功したことが一度もありません。けれども、これからどうなるか予想または直観する能力があると思っています。廃刊当時、数年後にはマンガが（欧州の）若者文化にまちがいなく影響を与えるようになると思っていました。出版家という職業は、厳しく孤独なものです。商人の感覚と芸術家の感覚の双方を同時に持たなくて

はなりません。第3回アルジェ漫画展（Salon de BD d'Alger）を見て、また出版をやりたくなりました。けれども、インターネットの時代では、紙の媒体はもはや売れず、また馬鹿なことをやってしまった、ということになると思います。

Q：2007年からCojaalで通訳・翻訳者として働いておられますが、この期間を通じ、アルジェリアの漫画がどのような段階にあると考えられますか。

A：フランスには、ドーミエ（訳注：19 世紀の画家。風刺漫画が有名）の漫画など、社会的あるいは文化的な革命を引き起こした漫画がありました。アルジェリアについてですが、漫画という（表現）手段を通じて若者が生きる、それが未来を明るくする、そんな風になって欲しいと願っています。アルジェリアは、豊かな国です。また、老齢化社会が到来した日本、欧州、米国とは異なり、将来性にじつに恵まれています。

Q：マンガに投資する好機がアルジェリアに来たのでしょうか。

A：マンガは表現の自由を促進する道具であるという意味で、マンガ・ブームの到来は有益かもしれません。とはいえ、マンガには厳しい弾圧が加えられるでしょう。なぜなら、アルジェリには欧州よりも厳しい検閲があるからです。マンガに対し過敏な拒否反応が起こらないように、出版する作品の選択に細心の注意を払うべきです。アルジェリアのマンガ投資にはリスクが伴います。フランスで印刷し販売し、それをアルジェリアに輸入するにせよ、アルジェリアで印刷するにせよ、発行部数はかなり制限されます。発行部数が少なければ、一冊当たりの価格は高くなります。そうなると、裕福な家庭の若者しかマンガを読むことができなくなります。普通の若者は手が届かなくなり、良家の子息しか買うことができないものになります。入念なマーケティングを行い、教育面や娯楽面でプラス効果のある物語を選ぶべきです。何でもいいから紹介するということは止めるべきです。ドルテ（訳注：フランス人歌手、TVで多数の日本製アニメを紹介するパーソナリティを務めた）が 1980 年代に行ったことは、悪い例です。ご質問に対する私の答えは「ノン」です。現時点でマンガに投資するのはリスクが多すぎます。商業ベースでも、やはり「ノン」。マンガの出版は儲からないでしょう。価格の引き下げという問題を解決して（たとえば、質が悪くても安い紙を探す）、すべての若者がマンガを購入して読めるようにならない限り、マンガへの投資は有望視されません。

Q：アルジェリアのオタクをどう考えられますか。

A：よい印象をもっています。若いときには何かに夢中になることが必要です。夢中になるから自己が形成されるのだと思います。けれども、何のオタクについて質問しているのですか。

Q：アルジェリア人のオタクです。その中でも、マンガやアニメの愛好家です。アルジェリ

アのマンガ市場には広がりがない。このため、市場の外にいるマンガ愛好家は、アニメで我慢するしかない。アニメなら、TV、インターネット、貸しビデオで簡単に見ることができますから。それで、あなたのアルジェリアご滞在中にマンガやアニメに夢中になったアルジェリア人にお会いになったことはないか。もし会ったなら、どんな印象をお持ちなったのか聞こうと思ったのです。

A：オタクと言うとき、何のオタクを指しているのか明確にしていただかないと。「オタク」は、少し前に日本でつくられた言葉です。私でさえ「オタク」の正確な定義を知りません。プロレス・オタク、ポップ・オタク、ロボット・オタクといった言葉は、耳にしたことがあります。ご同意いただけると思いますが、「オタク」とは、何かに夢中になった熱狂的愛好者を指すのではないでしょうか。

私は日本人のオタクに好印象をもっています。けれども、先ほど言ったように、よいマンガと悪いマンガを識別する優れた目を持たなくてはなりません。よいマンガを選ぶ責任は、子供の両親、編集者、TV 番組のバイヤーにもあります。

Q：日本の偉大なマンガ作家は、同時にアニメ映画のシナリオ・ライターであり監督であるという印象をしばしば持ちます。それは、つくられたストーリーをより良く伝えるためなのでしょうか。

A：そうではありません。アニメのシナリオを書いたり絵を描いたりする人は、多くの場合、マンガ作家とは別の人です。とはいえ、マンガの場合、多くの作家がストーリーを考えています。アニメをつくるには、大金が必要です。実例をご紹介しましょう。漫画界の巨人、手塚治虫は、マンガで大金を手にしましたが、アニメに手を出して自分のプロダクションをつぶしています。何年か忘れましたが、私は手塚治虫と一緒にアングレームの漫画博覧会に行きました。手塚がそこに行ったのは、自分のアニメ・プロダクションを立て直すために、TV 化された彼のアニメ作品の放映権を売るためでした。

Q：手塚治虫の作品と宮崎駿の作品とにどんな違いがあるのですか。

A：手塚のマンガはまず紙の上に画かれて売られます。そして、そのアニメが TV で放映されます。つまり、週に一本のテンポです。一方、宮崎のアニメは劇場用です。週に一本の TV 用アニメは労働集約的な作業が必要です。劇場用アニメ（90 分）と比べて 4 倍の人手がかかります。

Q：日本のマンガと他の国のマンガとどう違うのでしょうか。

A：日本のマンガと比べると、米国の「マルベル・コミックス（Marvel Comix）」はお話になりません。ベルギーやフランスの漫画は、第 9 の芸術とされています。日本では、マンガが芸術として見られることはないと思います。とはいえ、ごく最近になって、一部の日本人がマンガを芸術として考えるようになりました。

Q：高下太一という人は、マンガの登場人物との結婚について請願運動を大々的に行っています。二次元キャラとの結婚を法的に認めて欲しいというのが請願の内容ですが、すでに 1000 人以上が署名した請願が政府に提出されています。ここでは、マンガがとんでもない騒ぎを引き起こしたわけですが、これについてどう思われますか。賛成されますか。それとも反対ですか。

A：そのような請願運動は、ファンタジー（白日夢）にすぎません。けれども、この問題についてとやかく言う前に、社会に対する影響を知るべきであり、同時に、高下という男がなぜそのような請願を行うのかを知る必要があるでしょう。私は、それについて何も知らないと答えるしかありません。

Q：最後に、マンガ、アニメ、日本のポップ文化の好きな全てのアルジェリア人に対して伝えたいことは何でしょうか。

A：外来のものに興味を覚えることはよいことです。けれども、あなた方が持っている豊かさ、伝統、歴史を忘れるべきではありません。libin"aai almustaqbil alafdhal（より良い将来を創造する為に）。

インタビュアー：アミラ・ファラハ（Amira Farah）記者